国連・フランス３都市での訴え

写真の報告会が高槻市民会館であった。高槻の地に降り立ったのは初めてだ。賑わう商店街を抜けて、「高槻現代劇場」奥の会場にたどりついた。

案内チラシには「今年 3 月、福島原発事故の避難者が、国際 NGO の仲立ちで、スイス・ジュネーブ国連人権理事会で福島及びその他汚染地域に暮らす人々や避難者の人権について発言しました。一緒に行った避難者 3 家族は、フランスでも 3 つの都市で市民グループに招かれ､アピールを行いました｣と。

報告者は「東日本大震災避難者の会」の車田麻美さんと森松明希子さんと避難者（親子を描いた素敵な絵の家族)、そして NGO の皆さん。写真右の森松さんが国連人権理事会で､何度も練習して英語でスピーチした。大きな反響を呼んだ演説の日本語訳を紹介したい。

「森松明希子と申します。避難者である母親たちと、グリーンピースとともにきています。わたしは、2011 年 5 月、福島の災害から逃れるために、二人の子どもを連れて避難しました。原発事故直後、放射能汚染は広がりました。わたしたちには、情報は知らされず、無用な被ばくを重ねました。空気、水、土壌がひどく汚染される中、わたしは、汚染した水を飲むしかなく､赤ん坊に母乳を与えてしまいました｡放射能から逃れ、健康を享受することは基本的原則です。日本の憲法は､｢全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免れ平和のうちに生存する権利」と書かれています。しかし、日本政府は市民をまもるための施策は、ほとんど実施してきませんでした。そのうえ、日本政府は放射線量の高い地域への帰還政策にばかり力を注いでいます。日本政府は、国連人権理事会での勧告を、ただちに、完全に受け入れ、実施をしてください。国連加盟国のみなさんの日本の人々の権利擁護のはたらきに感謝します。今後も福島、そして東日本の、特に、脆弱な子どもたちを、さらなる被ばくからまもることに力をかしてください。ありがとうございました。」

国連だけでなく、フランス 3 都市でのアピールも満員の聴衆に感動をあたえた。あの 3・11 のとき東京に住んでいて、危険を感じて帰国したフランスの人の発言など、心にせまる報告が続いた。講演会というより、じつにビジュアルな「トークショー」という感じであった。和歌山の高校生をはじめ、若い人の参加と発言もあり、なんだか元気と刺激をもらった。会場には、現地の写真・資料など展示も数多くあり、じつに学ぶことの多い午後のひと時だった。これからも原発事故避難者の人たちの声に耳を傾けたい。

（2018 年 6 月 11 日）